



異端見からの手紙 1

novels

大森藤ノ

ベルへ

きょうから、おてがみを書くことにしました。

まえみために、会うことはできないけど、おてがみならいいよって、リドたちがいったの。

『ぶんつう』っていうんだって！

字は、フェルズにおしえてもらってます。

しっかり書ければ、こえがとどかなくても、おもいがつたわるって。

だから、わたしが見たり、聞いたりしたことを書いて、ベルにおしえてあげるね。

いま、すごく、むねがどきどきしてるの。

こわくはないんだけど、からだかぼかぼかして、くすつくたい。

ベルに読んでもらうのが、たのしみ！

だから、ベルも、おてがみをかいてくれたらうれしいな。

リドも、レイも、フィアもそわそわして、『きんちようする』っていったよ。

グロスは『へいきだ』っていったけど、みんなは『つんでれ』っていったの。

そのときのこと、おしえてあげるね——。

「ベルに会いたいなあ……」

ぼつり、と。

ウィーネの眩きが唇から落ちた。

冒険者もモンスターも知らない、とある『異端児の隠れ里』。

以前【ヘスティア・ファミリア】が足を踏み入れた、鍾乳洞にも似た広間だ。20階層の食料庫に近いこともあつて濃緑の石英が生え渡る、冒険者達にとって『未開拓領域』でもある。そんな迷宮の奥深く。

切り株ほどの滑らかな石の上に座るウィーネのもとに、蜥蜴人達が歩み寄る。

「なんだあ、ウィーネ？ ベルっち達とお別れして、もう泣かないって約束したんじゃないのかわかったのか？」

「キュウキュウ！」

「ワオーン！」

ウィーネの眩きを聞きつけたのか、蜥蜴人のリドが笑顔で茶化し、一角兎のアルルと黒犬のヘルガが似たような雰囲気醸し出しながら『そうだそうだ！』と鳴いてくる。

ウィーネはからかうリド達に、唇を尖らせた。

「泣かないもんつ。ちよつとさびしく思っただけっ」

冒険者達には『武装したモンスターの暴走』あるいは『モンスターの地上進出事件』と呼ばれる騒動から、既に二ヶ月。

リド達と出会ってから、ウィーネは随分と表情豊かになっていた。

多くの出来事を経て、目を見張るほど成長した彼女は今も多くのことを学んでいる。里の掃除や迷宮に突る美味しい果実といった些細な事柄を始め、同族や冒険者への正しい対処など、異端児の一員として様々な知識を身につけていた。そしてそこには勿論、感情の表現や意思の伝達、交流関係などもある。

ただただ無垢だった存在から、『少女』と呼べる存在に成り代わろうとしているのだ。

だから、『ホント？』などとニヤニヤと笑ってくるアルルを、がばつ！ と抱きしめた上にモフモフモフツ！ とモフるくらいの反撃はする。『ぎょえー！』と悲鳴を上げさせることもする。ちなみにアルルの相棒ヘルガはオチがわかっていたため素早く射程圏外に逃れていた。

ぼさぼさの毛玉となり、ぐつたりとしたアルルを抱えながら、ウィーネは頬を膨らませた。

「ベルたちといっしょに、まだ暮らせないのは、わかっているもん。でも、ここで会うことくらいは……できないかなって」

声は徐々に小さくなっていった。

それが我儘である自覚はあるのだろう。

ぐつたりとしているアルルをぬいぐるみ代わりにしながら、その後頭部に顔の下半分を埋める。

「ベルさん達ニモ都合がありますからね」

「ソモソモ、ソウ簡単ニ冒険者ヲ『里』へ入レル訳ニハイカン。アノ小僧達デアツテモダ」  
翼の音とともに、ふわつとウィーネのもとへ降り立つのは歌人鳥のレイと石竜のグロス。

彼女達もウィーネの会話に加わったことを皮切りに、周囲でくつろぎながら耳を澄ませていた他の異端児達もわらわらと集まってきた。

「ソレジャア、コツチカラ会イニ行ツチャエバ！」

「また地上に出ちまったら大騒ぎになるぞ、ラウラ」

「迷宮！ 場所！ 決メル！」

「階層ノいずかデ待ち合わせ、ということですか？ シルバ」

「ウオオオオオオオオオオオオ!!」

「ソコデ冥ナド開イテドウスル、トロール。オ前達ハ小僧達ガ来タ時ノヨウニ、再ビ騒ギタイダケダロウ。ソシテ興奮スルナ！ ウルサイゾ！」

カカトの半人半蛇、かろうじて単語を操る野猿、人語を喋れないため雄叫びを上げる大型級。他にも銘々、好き放題言つては騒ぐ同胞達に、リドやレイ、グロスが対応しては説き伏せる。自分を放り出して意見を言う同胞達に——自分と同じようにベル達と会いたがっている彼等彼女等に、ウィーネはきよんとした後、破顔した。

グロスが言葉にした通り、異端児達は暇だった。

敵密には今、異端児達は『休息中』だった。

目立ったダンジョンの異変もなく、協力者からの指令もなく、久方ぶりにまったりとした時間をしている。普段の彼等は迷宮の『異常事態』を鎮圧するため人知れず奮闘し、あるいはフェルズからの厄介事を解決するため奔走する。あるいは、ウィーネのように新しい『同胞』発見の報を聞きつけて全力で保護しに行く。

異端児達の移動範囲は冒険者の往来が激しい『上層』を除けば、『中層』から『深層』と、途轍もなく長大にして広大だ。

その分、特定の階層に設けられた『里』に一定の同胞を駐在させて拠点化しているが、彼等が主神に使役させられる上級冒険者以上に働き者なのは疑いようがない。

閑話休題。

ともかく、そんな働き詰めだった日々の中に舞い込んだ休暇だ。

いざ体を休むとなつても、強靱な怪物でもある彼等は一日二日ぐつすり寝れば傷も疲労もたちまち回復してしまう。地上の人間と異なり『娯楽』が少ない——趣味や余暇の活用手段が乏しい異端児達は、暇を持てあましていたのだった(稀に見る多忙な大事件続きの反動もある)。

そんな暇人ならぬ暇モンスターだった異端児達は、ベル達の話題にここぞと食いついたのだ。「まあ、ベルっち達を里に入れるわけにはいかねえつつうグロスの照れ隠しは今更だし、置いておくにしてもよー」

「照レ隠シナドデハナイ!!」

「ベルっち達との接触は、フェルズにも『まだ待つてくれ』って止められてるんだよな」

グロスの叫びを無視しながら、リドが尖った爪で首の辺りの鱗を引っかく。

「オレっち達が地上で起こした騒ぎは、ほとぼりが冷めつつあるらしいんだけど……ベルっち達はベルっち達でてんでこ舞いらしくてよ」

『ア~~~~~』

ベル達も超多忙、という言葉に人語が喋れるモンスターも喋れないモンスターも、一糸乱れず納得の息を吐き出す。

「時期は見計らってるらしいんだけどな……オレっち達のせいでベルっち、余計に有名人になつちまったらしくて、ダンジョンにもぐるだけでも注目を集めちまうんだと」

最後は決まりが悪そうに、リドはフェルズとの会話を語った。

迷宮街攻防戦での立ち回り——具体的には『黒い猛牛』との戦いによつて、零落していた少年の評判は持ち直し、それどころかより人気が上がりつつある。

今、【ヘスティア・ファミリア】が『遠征』に繰り出せば神々も派閥も注目し、そうでなくともちよつと『中層』へ出かけるだけでも「何かお宝の情報でもあるんじゃないか？」と勘繰

られ、場合によっては嗅ぎ回られる始末だ。

それほどベル達も脚光を浴び、成長しているということでもある。

そしてその原因を直接招いてしまった異端児一同は『ウ〜ン……』と唸り声を上げてしまった。後ろめたいと思うと同時に、ベル達と会うのは思ってた以上に難しそうだと、ようやく気が付き始めたのである。

「やつぱり、ベルたちとは会えないかなあ……」

ウィーネもしよんぼりしながら、そう諦めかけた、その時。

「——それでは！ 手紙を書くのをはどうでしょう！」

クルクルと回転しながら、宙高く跳躍した半人半鳥が、ぱつと翼を大きく広げた。

「てがみ……？」

「ええ、そうですウィーネ！ 貴方の想いを綴って、地上のお方達に届けるんです！」

まるで曲芸師の演出のように羽根を舞い落とし、同胞達の視線を集めた半人半鳥のフィアは、すいーつとウィーネの側まで降りて浮遊する。

不思議そうな顔をする竜の少女を他所に、リドやレイが口を挟んだ。

「手紙って、あれだろ？ 紙に字を書いて……とにかく読み書きするっていう、あの」

「道具が揃っていなければ書けないのではないですか？」

「問題ありません！ ——レット！」

「お任せください！ 羊皮紙もペンもここに！」

フィアが意気揚々と名を呼ぶと、赤帽子のゴブリンが羽根ペンと少し汚れた羊皮紙、おまけにインク瓶を持って颯爽と登場する。手際がいい二匹に「い、いつの間に……」とリドとレイ

は呻いた。

ちなみに、羊皮紙は落ちていた冒険者の荷物から回収したもの。

ペンの方は、なんと手先が器用なレットがフィアの羽根を用いて自主作成した——壊れた魔道具を参考にした——異端児印の羽根ペンだ。別名『半人半鳥の鷲ペン』。

最後にインクは、二匹で五体投地してフェルズに地上から持ってきてもらった。

「地上の方々の文化なら任せてください！ この『レット・あんど・フィア』が古い情報から新しい情報まで網羅しています！」

「網羅ハ言い過ぎドロウニ……」

「ていうか、その冒険者みてえな二つ名も初めて聞いたぞ……」

片翼を器用に胸へ添えて勝ち誇るフィアに、グロスとリドが呆れた目を向ける。

半人半鳥のフィアと、赤帽子のレットは地上の文化に興味を持っている。

強いて言うのなら『融和派』で、人類との共存を強く願っている。

狩猟者の事件が起きた当時、フィアは捕えられてしまったが、レットは戦いを最後まで止めようとしていたリド側にずつついていたほどだ。

異端児の中で、リドとウィーネを除いて流暢な人語を喋れるのはフィアとレットのみ。

彼女達も『夢』の中で——『前世』で——地上や人類に『強烈な憧憬』あるいは『関心』を抱いたモンスターである。

「これを使ってベルさん達と『文通』をしましょう、ウィーネ！」

―続きはVol.1特典短編小説本誌にて！